

此の曲輪は、權現堂の後。地にて、元は北丸の内なり。慶長の金澤城古圖に、小塚藤右衛門第地の由記載す。三州志來因概覽附録に、小塚丸、今は藤右衛門丸と云ふ。古へ小塚藤右衛門第ありし故なり。古圖に幅員四十間に三十三間とあり。北丸の隣地なり。貞享の圖には、此の地既に接木畑とあり。按ずるに、其の初め二丸に第有りて、藤右衛門丸と云ひし事武貞筆記に見ゆ。然れば藤右衛門第初めは二丸に在りて、後に此の地に移る歟。とあり。平次按ずるに、有澤武貞の金澤細見圖譜に、二丸には長氏の屋敷在りたり。或は藤右衛門丸と云ふは、小塚氏の居住の地也と記載すれば、二丸と藤右衛門丸とは、別曲輪なる事勿論なるを、富田景周見誤りて、二丸に藤右衛門丸とて小塚氏の第地ありたりといへるもの也。金城深秘録にも、二之丸には長如庵居住、藤右衛門丸と云ふには小塚藤右衛門居住、柳瀬陣に討死也。と載せたり。右藤右衛門は、小塚淡路秀正の兄なるが、利家卿尾州荒子以來の従士にて、天正十一年四月江州柳瀬合戦に苦戦して討死すと云ふ。

○小塚藤右衛門略傳

國事昌披問答に云ふ。或筆記に、弘治年中より利家卿へ御奉公申上げたる荒子六人衆と云ふは、高昌孫十郎・村井長八郎・原田又右衛門・小塚藤右衛門・木村三藏・吉田孫兵衛是也。又越前府中衆と云ふは、青山與三・高昌孫十郎・吉田孫兵衛・同長藏・奥村助右衛門・原田又兵衛・小塚藤右衛門。其の外十三人、於是知行被下之。といへり。村井長明の陳善録に、越前府中利家様三萬三千三百石御取被成候刻云々。二百石小塚藤右衛門・百八拾石木村三藏・百五拾石富田與五郎。右三人は柳瀬にて討死之由御意之事。又大納言様昔御物語被成候。村井豊後・岡田長右衛門なども語り申候。いなみと申す博士、京の者、利家様御目懸被遣候故、越前府中の時御見廻に罷下、大納言様後は日本のかたぶくか、天下御取可被成と占候。御内衆村井豊後・篠原出羽・岡田長右衛門は後の仕合、木村三藏・小塚藤右衛門・富田與五郎は討死可仕と占、合申候。何茂く御機嫌能き時は御咄被成候。又、近江淺井と御取合ひ、柴田修理殿殿りの時、引取候様にと、日暮に蜂屋出羽殿御使に被參候へども、埒明不申候。又左衛門參りて申渡候様にと、信長公御意候。畏御越

候處、敵したひ付候を、大納言様居とまり鎧合被成候。御側にて村井豊後・木村三藏・小塚藤右衛門など鎧を突き追崩し候。其時柴田殿殊の外、大納言様御禮被申、右三人にも銘々に御禮に候。此儀度々御咄被成候。又、越前刀根くづれの時、大納言様兩度迄鎧を御合せ、二度目に越前大將分の首を御捕被成。其後村井豊後・木村三藏・小塚藤右衛門兩三人、御近所にて鎧を合せ、銘々に首を取候由御意也。又柳瀬合戦の時、御備に置かれ候衆の内、小塚藤右衛門・木村三藏・富田與五郎其外五六人、三度まで敵を突き崩し、枕をならべ討死仕由、大納言様度々御物語被成、是等の者共今居候は、一萬石程遣し申者之由御意被成候。とあり。平次按ずるに、江州柳瀬合戦は天正十一年四月にて、前田創業記に、北軍愈壞潰大亂。不知主從。離散敗走。於是小塚藤右衛門・木村三藏・富田與五郎。周旋數苦戰。遂殞命。と見ゆ、さて秀吉公、柴田勝家を滅亡せしめ、加州へ出馬ありて、佐久間盛政の居城金澤の城郭を請取り、利家卿へ賜はりたり。然らば當城内に、小塚藤右衛門の第あるべきよしなし。おもふに、藤右衛門が弟淡路秀正が舊第にて、

秀正は七千石賜はりたり。秀正初め八右衛門と稱すといへり。

○御宮坂門

三丸より甚右衛門坂口へ出づる權現堂の前までの坂路を、御宮坂と呼び、此の坂路の間にある門なるにより、御宮坂門と稱す。十二冊定書に載せたる寛延二年の割場格帳に、御宮坂并に御宮前掃除の事を載せたり。又雪除けの所附條書に、土橋御門より御宮坂御門之方并に甚右衛門坂下迄。とも見たり。おもふに、御宮坂の地名は、寛永廿年東照宮を此の地に勸請せられしよりの名にて、權現堂とも御宮とも稱したる故也。當國河北郡に宮坂村といふあり。此の村は黒津船舊社地の神前に村落ありて、天正十一年四月豊太閤の制札におまへ坂と載せられ、延寶四年八月の達書に粟ヶ崎御宮坂と記載し、元祿十四年の村名由來書に御宮坂村とありて、むかしは御宮坂と呼べり。今も諺に、御宮坂に鯛のとれたやうなといふ言葉残り。是も古へ黒津船浦に小濱神社ありし頃、社殿の前なる坂路なるにより御宮坂と呼びたるもの也。權現堂の御宮坂も是と同じといへり。